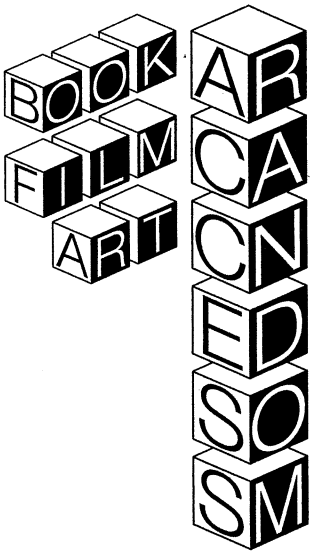


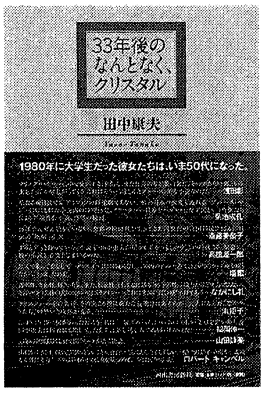
ランダム・アクセス

BOOK

黄昏た社会の中で光る「クリスタル」な人々

『33年後のなんとなく、クリスタル』

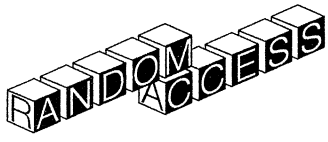
田中康夫著　河出書房新社　1600円



本書のカヴァーは、水色。ティファニーの色だ。かつて日本には、クリスマス・シーズンとなると、ティファニーの水色の紙袋が街にあふれていた時代があった。『なんとなく、クリスタル』は、そんな消費社会の爛熟期、つまりバブル絶頂期を先取りしていたミリオンセラー小説として知られる。本書は、33年後に出版された続編である。

『なんクリ』は、現役の私大生だが、モデル・クラブにも所属している「私」こと由利の一人称形式による小説だ。対して、本書は知事や国会議員を務めたことがあるヤスオの視点で綴られており、虚実相半ばした私小説風である。阪神大震災のとき、ヤスオはフランス系の化粧品会社に勤務していた由利に、被災者のために口紅や化粧水を提供してもらえないだろうかと持ちかけたところ、彼女は上司との仲介役を果たしてくれたという。田中康夫は、過去にこの話をどこかで書いていたので、由利は実在の人物がモデルだろう。現在はPR会社を経営している由利は、多忙な日々を送りつつ、南アフリカの人々に眼鏡を無料配布する社会貢献活動に携わっている。54歳で独身。33年前より素敵な女性になっている。

本書には由利の友人だった江美子や早苗も登場し、ヤスオと会話している。レストランや彼女たちの友人の家で、フランス料理やシャンパーニュを嗜みながら。ただし、登場人物たちは、皆多かれ少なかれ日本社会を憂いている。また、巻末の膨大な注も、政治や経済に関する言及が多い。若い世代の人たちにとって『なんクリ』はおとぎ話だろうが、この続編はいわばくすんだクリスタルのような現実の日本の話であり、ずっと社会批評性が強い。

最終章がなかなか良い。AORが流れる表参道の美容院でヤスオは、あの頃を回想しつつ、将来の日本を幻視している。「黄昏」という言葉が出てくる。すでに黄昏れた日本。が、ほのかに差す光がある。自分らしい生活スタイル（矜持を含む）を持っている人々。そんな都会の部族には、光が見える。だから由利もヤスオも、その光に向かって歩み出す。彼らこそが、本来の「クリスタル族」なのだから。

渡辺亨